

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

# 温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2022.12 Vol.41

令和4年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター  
 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号  
 TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125  
<https://www.suac.ac.jp/library/>

## Contents

### ■表紙

The 100 best posters from  
Europe and the United States  
1945-1990 ①

### ■図書館散歩

フィールドワークの原風景 ②

—伝説、殺人事件、憧憬の道—

国際文化学科 教授  
二本松 康宏

五感から理解が深まる本 ③

デザイン学科 准教授  
荒川 朋子

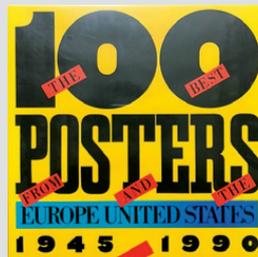
### ■特集

わたしの1冊 ④

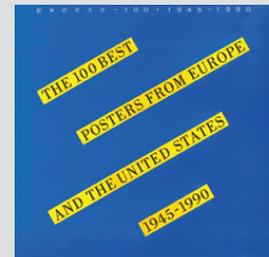
～おすすめの本を紹介します～

### ■図書館ニュース 特別企画

有馬朗人先生が語る  
思い出の本 ⑤



The 100 best posters from Europe and  
the United States 1945-1990



欧米のポスター100・1945-1990

The 100 best posters from Europe and the United States 1945-1990  
[edited by Selection Committee of "The 100 Best Posters from Europe  
and the United States" and Toppan Printing Co., Ltd.]

Toppan Printing, 1995

[727.6/Se 47]

当館ではこの春、据付型のPCルームとして利用してきた館内の「メディアステーション」を改修し、グループワークやプレゼンテーションなどの新たな学びが実践できる場にリニューアルしました。名作家具と呼ばれる、デザイン史に名の残るチェア等を配置し、ガラス面にはデザイナーを表示しました。このように「デザインアーカイブ」としても活用されているメディアステーションに於いて、前センター長の伊豆裕一先生の企画によるポスター展「ポスターでみる20世紀1950-1990」を開催しています。今回は、この展覧会で展示しているポスターを掲載した図書をご紹介します。

"The 100 Best Posters from Europe and the United States 1945-1990"は、凸版印刷株式会社が1995年に刊行した欧米の名作ポスター集です。第二次世界大戦後の1945年から1990年までに、ヨーロッパとアメリカで制作されたポスターの中から、厳選された100点を解説付きで紹介しています。本書刊行後の1995年6月には、東京駅構内の東京ステーションギャラリーに於いて、欧米のポスター100点に日本のポスター40点を加え計140点で構成した展覧会「欧米のポスター100」展が開催されました。

100点のポスターは、アメリカのグラフィックデザイナーであるミルトン・グレイザー、デザイン評論家のスティーヴン・ヘラー、フランスの美術評論家アラン・ヴェイユが選定し、日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）初代会長を務めた亀倉雄策が監修しました。本書に掲載されたポスターはすべて復刻され、欧米やアジアをはじめとする国内外約200箇所の美術館や大学などに寄贈されました。

印刷技術の発展に伴い、ポスターは広告や宣伝の媒体として、目覚ましい発展を遂げました。ポスターの隆盛とともに、グラフィックデザインはひとつの表現領域として洗練され、それを専門とする優れたデザイナーも多数誕生しました。さまざまな社会環境の中で生まれたポスターは、まさに「時代を映す鏡」です。ポスターを通じて、その国や社会の文化、その地に暮らす人々の思いが伝わってきます。

#### 参考文献：

欧米のポスター100選定委員会[編]『欧米のポスター100・1945-1990』[727.6/Se 47]

伊豆裕一[著]「ポスターでみる20世紀 1950-1990」（静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより『温故知新』Vol.39）



国際文化学科 教授  
二本松 康宏  
Nihonmatsu Yasuhiro

関連するおすすめ図書

半村良〔著〕  
『戸隠伝説』  
913.6/H 29

パワースポットとして話題の戸隠が舞台

半村良〔著〕  
『産霊山秘録』  
913.6/H 29

2022年度後期・日本文学作品研究のテーマ「諏訪縁起と甲賀三郎」に通じる世界観

半村良〔著〕  
『闇の中の系図』  
913.6/H 29

古代から“嘘”を生業として歴史の陰に暗躍してきた嘘部一族が現代によみがえる

福田晃〔著〕  
『中世語り物文芸—その系譜と展開—』  
913.4/F 74

内田康夫〔著〕  
『戸隠伝説殺人事件』  
913.6/U 14

内田康夫〔著〕  
『浅見光彦シリーズ』  
テレビの2時間ミステリーでもおなじみ

隆慶一郎〔著〕  
『吉原御免状』  
918.68/R 98

江戸の花街・吉原。それは自由の民たちの城塞だった。

隆慶一郎〔著〕  
『鬼磨斬人剣』  
918.68/R 98

隆慶一郎〔著〕  
『影武者徳川家康』  
918.68/R 98

駿府や遠州二俣、天竜川、東海道筋など静岡県内の各地が舞台

## フィールドワークの原風景—伝説、殺人事件、憧憬の道—

### 半村良『戸隠伝説』

「十有五にして学に志す」とは『論語』の一節である。私が「伝承文学」への探求を志したのもちょうど15歳の頃だった。きっかけは半村良の伝奇小説『戸隠伝説』である。

東京で作家の助手をしていた井上昭は謎の女性・ユミによって戸隠へ導かれ、古き縄文の神・キララとして覚醒する。神話の里・戸隠で、かつて彼らの土地と神の名を奪った高天原の神々との激闘が始まる。

物語の舞台は私の故郷である。当時の私は、戸隠神社の祭神は天岩戸神話で活躍した天手力雄命らだと疑いもなく信じていた。戸隠小学校でそう習うのだ。だから、高天原の神々よりも前に戸隠を支配していた縄文の神々、という設定に衝撃を受けた。

実は、1970年代から80年代にかけて、いわゆる「日本原住民論」というのが流行していた。ヤマト朝廷は外来の政権であり、それ以前の日本列島には縄文文化につながる原住民がいた、という説である。15歳の少年にはその「消された歴史」がたまらなく魅力的に思えた。半村良の『戸隠伝説』をきっかけに、八切止夫の『日本原住民史』や太田竜の『日本原住民史序説』といったトンデモ本までも読み漁るようになる。

いったん「日本原住民論」にはまってしまうと、そこから「鬼の伝説＝先住民の消された歴史」説へたどり着くまでにそれほど時間はかからなかった。「戸隠に伝わる鬼女紅葉伝説はヤマト朝廷に滅ぼされた先住民の消された歴史」という、どこかで聞いたような解釈に没頭し、信州各地の鬼の伝説を訪ねて我流のフィールドワーク（のつもり）を重ね、ときに論文（のようなもの）を書いてみたりした。高校からの帰りには長野県立図書館の郷土資料室へ通い、おかげで“ポッチ”の“陰キャ”へとまっしぐらである。

### 福田晃『中世語り物文芸—その系譜と展開—』

鬼の伝説に関する本をとにかくにも手当たり次第に読み漁っていたら、とうとう福田晃の著書『中世語り物文芸』に行き着いた。福田晃は鬼女紅葉の本質を「山中にひとり神を守る山の巫女であり、山の神そのものである」と説く。それはまさに目から鱗が落ちたような目覚めだった。伝説の本質に挑むには伝承文学というジャンルがあることを知る。

とはいうものの、なにしろ平日からフィールドワーク（のつもり）に勤しみ、高校の授業はサボってばかりだった。それでも高校3年の冬になってようやく受験勉強に一念発起。2浪の末、やっとのことで立命館大学へ入学する。

入学式の翌週には福田晃教授の研究室を訪ね、「戸隠から来ました。先生の弟子にしてください」と弟子入り志願に及んだ。先祖代々、大学とは縁のない家庭に育ったので、そもそも大学がどういうところかわかっていない。「大学には弟子とかそういうのはありません」と諭されながらも、結局、そのまま事実上の内弟子となった。

### 内田康夫『戸隠伝説殺人事件』

大学を目指して浪人している頃、私の人生に強い影響を及ぼすもう一つの本と出会った。ミステリー作家・内田康夫の『戸隠伝説殺人事件』である。

戸隠に伝わる鬼女紅葉伝説に見立てられた連続殺人事件に「信濃のコロンボ」こと長野県警の竹村岩男警部が挑む。

『戸隠伝説殺人事件』の主人公は竹村岩男警部だったが、内田康夫作品といえぱなんといっても名探偵・浅見光彦が有名である。竹村警部シリーズも浅見光彦シリーズも、それこそ片っ端から読み漁った。現在でこそ伝承文学だの民俗学だのと自称してフィールドワークのエキスパートのようなフリをしているが、実を言えば私のフィールドワークの技法は内田康夫作品、とりわけ浅見光彦シリーズから学んだところが少なくない。

浅見光彦は永遠の33歳だが、私はまもなく56歳になる。それでも、今、大学の公用車（プリウス）を走らせて北遠のフィールドワークへ向かうとき、私の脳内は愛車ソアラを駆る名探偵・浅見光彦になりきっていることをここで密かに自白しておく。

### 隆慶一郎『鬼磨斬人剣』

高校時代に読み耽った半村良、大学時代に読み漁った内田康夫ときて、そしてもう一人、私の人生に強い影響を与えたのは歴史作家・隆慶一郎である。

1984年、脚本家だった池田一朗は60歳を過ぎて作家・隆慶一郎として文壇に登場した。彼の恩師である小林秀雄（1983年没）が存命のうちは、怖くて小説は書けなかったのだという。1989年、隆慶一郎は66歳で亡くなる。わずか5年の作家活動だった。歴史学者の網野善彦や民俗学者の谷川健一から影響を受けたとされる隆慶一郎の『吉原御免状』『影武者徳川家康』『捨て童子・松平忠輝』などは私の書齋にあって、いわゆる座右の書となっている。とくに第二作にあたる『鬼磨斬人剣』は、むしろ福田晃が亡くなった今になって、偉大な師の学問をどのように継承し、どのように超えてゆくか、いつも私に問いかけて来る。

幕末の名刀匠・源清麿の弟子である鬼磨は、亡き師が心ならずも遺した数打ちの駄刀を探し出し、それを毀すために旅を続ける。そしてたどり着いたのは師の最高傑作ともいべき名刀と彼自身の作刀の境地だった。



デザイン学科 准教授

荒川 朋子

Arakawa Tomoko

推薦図書

世界文化社[発行]  
『ドレミファランド』  
726.6/D 87

沖潤子[著]  
『Punk』  
753.7/O 51

村岡典美男[著]  
『秘儀荘 = Villa of the Mysteries』  
721.9/Mu 55

パジャマ・シャーム[ほか]画:  
青木恵都[訳]  
『夜の木』  
726.6/Sh 99

アンデルセン[原作]:  
清川あさみ[絵]; 金原瑞人[訳]  
『人魚姫』  
726.6/A 46

photographs by Nick Knight  
『FROLA』  
706.919/C 27

foreword by Kenneth J. Foster  
『Nick Cave : meet me at  
the center of the earth』  
753/H 71

ひろいのぶこ[著]  
『旅する布 : Traveling textiles :  
works/words/worlds』  
727/Y 15

八木保[著]  
『八木保の選択眼』  
727/B 31

シャーロン・ピールズ[著]  
『鳥の巣 :  
50個の巣と、50種の鳥たち :  
写真集』  
488.1/B 31

岡倉天心[著]  
『茶の本 = The book of tea』  
(対訳ニッポン)  
791/O 41

## 五感から理解が深まる本

実際に本を手取るにより、文字情報に置き換えられない五感から理解が深まる本、というのも魅力的な存在かなと思います。わたくし自身が作り手で、素材、手触り、奥行きのあるものを日々扱っているせいでしょうか、資料として紙媒体になった途端に別物になりますので、その両者の隙間を埋めるような、良イトコドリの本との出会いは大変嬉しく感じます。

記憶に残る最初の本の出会いはレコードと絵本が一体になった世界文化社『ドレミファランド』全16巻シリーズでした。本を開きレコードをセットし、針を円盤に落とす緊張感から始まるもので、プツ、プツという独特のレコード音、しばしの沈黙、物語が語られるというプログラムの記憶があります。当時気に入ったものは、何度も繰り返し聴いては、画と声とメロディがミュージカルやオペラのようにリズムを持って頭の中を駆け巡っており、とにかくワクワクの時間で「本のページをめくる」という行為がこんなにも楽しいものと思わせてくれた出会いでした。

またレコード盤を丁寧に扱うことや埃を避ける方法、半円型で半透明のビニール袋にきれいにに入れて、本の指定された隙間にキッチリしまうことなどを教わりその一連の動作を、所作というには大袈裟ですが当時の私は大人から許された唯一の儀式じみたものにとらえており、なんとも優しい時間でした。

世界中から熱狂的なファンのいる刺繍アーティストの作品集『PUNK』（沖潤子著）は、隅々まで神経の行き届いたこだわりを感じ、独特な風情を醸し出す本に仕上がっているかなと感じて好きな本です。手触りは布のように柔らかくしっとりしていることに気づくと思います。背表紙なしの糸綴じ仕上げは並置混色の織物のようで楽しく、そしてよく開く心地よさがあります。刺繍といっても、ハウツー本ではなく、古い布や道具が経てきた時間、またそのモノたちの歴史物語の積み重なりを、刺繍を重ねていくという膨大な時間が伴う行為へ昇華され、糸によって布に描かれ記憶されていく作品群です。巻末に作品115の短い文を書かれています。個展会場に伺った際に近寄りたくも離れたい展示空間を作っていたものたちが、急に親しみを覚えて心を開き近くへ歩み寄ってきたようで、圧倒的な作品と合わせて、いくつかだけでも読んでいただくと理解の手助けになりそうな良い感じでした。

手取るたびに沖氏はこういったセレクトでこの本を作り上げたのか、最終的に出版されたこの本の他には、どんな候補があったのか、彼女のデザイン思考に近づきたい気持ちに囚われます。

日本画家作品集の『秘儀荘』は何か不思議な魅力に溢れた本です。佇まいはイタリアンレッドの厚い紙でサンドクッキーのようになっていて、ページをめくる度に、舞台という場面転換があるような、様々な趣向が繰り広げられており、油断できず、手もたくさん動かし、一般的な本に比べて読むのに「忙しい」感覚です。配されたデザインにおいて観る側の視点の動きも安定せず、良い意味で裏切られ続ける期待に応えるという作りで、最後のページまで一貫して駆け抜けていきます。村岡氏を日本画という括りですと説明しやすいですが、挑戦しその枠を超える表現とアイデアと確実な実力で様々な表現技法を取り入れた作品を作り出す、その作者らしさが、この本のプログラムと重なって見えてくるようです。作品集に留まらない「作品集という作品」のような完成度にひしひしと感じ入ります。

ポンペイの秘儀荘について巻末で触れていますが、まさに私自身も同じような経験をしていました。遺跡群から離れたところにあるせいか観光客が少なく、細い道をまあるいてたどり着き、ただ強烈な感動で陽の傾きを忘れ数時間地面に足がくっついて離れなかったあの「絵」、村岡氏のいう「『絵』ではなく『建物の一部』であり『遺跡』」は、宗教画ではないですし正確な意味を理解しているわけではありませんが、その影響を受けているこの本によりナポリ、ポンペイにある、あの秘儀荘の赤い空間、テクスチャ、色感、匂い、陽射し、音を少しでも共有できたら嬉しいかな、とも、ふと、思います。

『夜の木』はハンドメイドの絵本であることに大変特徴があります。この本はすべて黒い紙でできていますが、紙も手作り、麻と綿の古布を原料にして漉き、脱水乾燥、さらに研磨を施して艶を出し、澱粉でしみ止めを施して、シルクスクリーン印刷をし、手製本によって仕上げています。またインクの匂いが心地よいです。美しいデザインと印刷、内容もさることながら、本の質感と手触りからもその稀有で不思議な魅力を読者に届けるこの本を、一度は手にとっていただき、完成度がありながらもヒトの温もりを感じる、美しい佇まいを確認して欲しい一冊です。

『人魚姫』（アンデルセン原作、清川あさみ 絵）は「絵」と呼ばれている部分が、すべて布、糸でできており、透明感に溢れ触覚的な本です。的確なデザイン力と色彩感覚、また様々なテクスチャが効果的で布の重なりから生まれるモアレ現象をも表現に加えており、他に勝るとも劣らないテキスタイルの絵画表現になっていることを感じられると思います。

『FROLA』は押し花の写真集です。人によって受け止め方は様々あると思いますが、著者の花への、感情を伴う感性が留めおかれていることを感じられると思います。具象的というより、抽象絵画を観るような感覚に引っ張られます。

『ヒトリコ』

額賀滯 [著]  
小学館, 2015  
[913.6/N 99]



わたしの一冊とのことで、中学生の頃から私を支えてくれているこの本を紹介しようと思います。

この本の主人公、深作日都子は、小学5年生の時、クラスで飼っていた金魚を殺した濡れ衣を着せられてしまいます。クラスから孤立してしまい、何もかもがおっくうになってしまった彼女は、関わらなくてもいい人とは関わらない、「ヒトリコ」になることを選びます。そんなヒトリコになった彼女が、ピアノ、合唱、そして周りの人の影響によって、少しずつ心境が変化していく様子を綴ったお話です。

初めて読んだ当時、私は常に友人関係で悩んでいました。そんな時にこの本を読み、ヒトリコを貫き通そうとする、毅然とした彼女の姿勢に憧れたのを今でも覚えています。それから現在まで、人間関係につまずく度にこの本を読み返しています。

この物語は、複数の視点から語られるという特徴があります。もちろん、日都子の視点から語られることが多いですが、彼女の周りにいる人たちの視点から、日都子や彼女らを取り巻く出来事を、日都子以外の人物から語られているのが、この物語に深みを与えていると思います。

また、この本を語るうえで欠かせないのが、作中何度も歌詞が出てくる「怪獣のバラード」という合唱曲です。砂漠に住んでいた怪獣が、自分の夢を叶えようと、砂漠を捨て、新しい場所へ向かう、という内容で、暗い描写が多いこの本とは対極的な曲といっても過言ではないでしょう。しかし、読み終わったあと、この本のテーマ曲は何か？と考えたとき、怪獣のバラードしか思いつかないくらい、この物語を象徴する曲です。この本を読もうと思った時、もしくは読み終わった時には、ぜひこの曲を聴いていただきたいです。

心が締め付けられるような暗い話ですが、読み終わった時、希望も不安もすべて包み込むような朝焼けの暖かさが心に残る一冊です。人間関係に少し疲れたあなたにぜひ読んでいただきたいです。

【文化政策学部 文化政策学科 2年 田島 千歳】

最初に言わせていただくと、この本を読んだからといって人生の目指すべき道が突然見えてきたり、涙が止まらなくなって困ったりすることはきっと無いと思われれます。これはそういう高尚な本ではありません。その代わりにこの本は、つい愛着が沸いてしまうキャラクターたちのまほろ市での暮らしぶりを、私たちに垣間見せてくれます。

このような言い方をしてしまうと、ほのぼののハートフルストーリーが小説内で繰り広げられているような誤解を生んでしまいますが、そうではありません。便利屋を営む多田は高校時代に特に親しくもなかった同級生の行天と偶然再会し、そこから二人がコンビとなり便利屋を営んでいくという筋書きです。最初は便利屋という職業ゆえに、面倒ごとや事件が舞い込んでくる苦労人の多田が常に可哀想です。一方で彼の悩みの種でもある変人の行天がやっていることは一見すると減茶苦茶ですが、それが事件解決に結びついているのが憎めないところ。時折、コンビらしい軽快な掛け合いが繰り広げられつつも、それぞれが抱えている秘密や因縁が、次第に明らかになっていく流れにとっても引き込まれます。

二人が便利屋としての案件をこなしていく中で、沢山の悩みや憤りを抱える人たちが登場します。人と人の考えていることや性格が違うからこそ、すれ違いや誤解が生まれてしまう。この本はそんな当たり前のことを丁寧に描き、再確認させてくれた作品でもあります。蟠りを抱えつつも便利屋との交流の中で、登場人物たちが少しでも前向きになって日々を歩む姿には感慨深いものがありました。

近頃あまり小説を読まなくなりましたが、そんな私でも、キャラクターにぐいぐい引っ張られ、負担なく読むことができました。途中少々アウトローな場面もありますが、漫画のように情景が浮かんで来て、スピード感のあるとても読みやすい本だと思います。個人的には行天の変人ぶりが大変お気に入りでした。気が向いた方は、是非読んでみてください。

【デザイン学部 デザイン学科 2年 大平 乃与莉】

『まほろ駅前多田便利軒』  
(文春文庫)

三浦しをん [著]  
文藝春秋, 2009  
[913.6/Mi 67]



## 特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

本書は、グローバル化・民営化・分権化など前提とした行政課題の多様化・政策手法の現代的発展に対して現状と今後の展開可能性をあたえる、我が国の行政法学の第一人者による一冊です。京都大学大学院法学研究科教授（行政法）である著者は、驚くほどの明快さと網羅性を両立させながら、晦渋なドイツ法の議論動向の研究成果を我が国の具体的政策課題解決にいかし、法解釈のみならず政策論をも展望しており、この領域での必読文献のひとつです。

たとえばBISによる銀行自己資本比率規制（バーゼルⅢ）などのグローバルな基準が、告示通達など「行政規則」、すなわち民主主義的正統性をもつ法律やその委任立法（「法規命令」）を迂回する仕方、国内の行為規制として浸透しているなかで、法律による公権力の制御を中心に構築された行政法理論はいま根本的な変革にせまれ、政策実現過程のグローバル化や民営化のなかでの行政規則や（国際的）自主規制基準などのソフトローを射程に入れた「国際行政法論」「多元的法関係」が展開しています。本書では、たとえば、①行政による許認可プロセスにおける判断を民間機関がになう「第三者認証・適合性評価」を例に、法治国家における民主主義・自由主義などの正統性概念とは異なる正統性概念の登場とそれに対する法システムの反応、②民営化論とこれに対する規制の品質保証の観点から政府による再規制論、③バーゼルⅢ、国際会計基準、ISOなどの国際規制基準と伝統的行政規制システムが接続してゆくことによる行政法の学問体系の変容、④行政法と行政学の接近をふまえ、「立法の質」とその（政策）評価基準にとって、憲法規範のはたす役割など、綿密な具体例の調査をもとに政策展開の可能性や行政法体系へのインパクトが、明快に説明されています。

とくに、現代美術への振興助成政策に関して、立憲国家の「中立性原則」が、芸術の自律性尊重の裏面として国家的関与の自制（不作為）に帰結した問題点を分析し、援助の機会の均等という意味での「中立性」の展開可能性に再構成し、専門家集団を関与させた議会以外の公共空間における熟議過程を、「多元的法関係論」と関連付けた論者は、文化芸術と公共政策のあり方を考える皆さんに、ぜひ一読いただきたい一冊です。

【文化政策学部 文化政策学科 准教授 塩見 佳也】

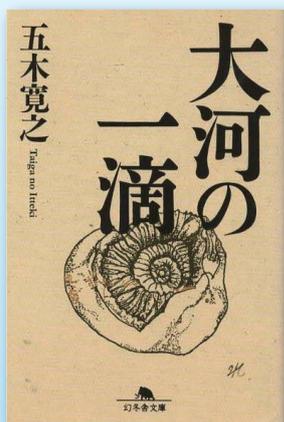
### 『公共制度設計の基礎理論』 （行政法研究双書、30）

原田大樹 [著]  
弘文堂, 2014  
[323.9/H 32]



### 『大河の一滴』 （幻冬舎文庫）

五木寛之 [著]  
幻冬舎, 1999  
[914.6/191]



学生にアートマネジメントを教えるようになって5年の月日が流れました。どの大学でも「生きにくさ」に悩む学生と出会います。そして、私も、研究仲間と共に「生きにくさ」に焦点を当てながら、ケアとアートマネジメント／文化政策との接点を探究しています。

本稿の依頼を頂いた際、一旦は教員という立場上、専門書を紹介しようかと考えました。しかし、「わたしの1冊」を突き詰めたとき、『大河の一滴』しかないと思ったのです。

「自己語り」ですが、本書を初めて手にしたのは、高校生の時でした。当時の私は、自分が生きている「いま、ここ」と、世界のどこかで苦しんでいる人々の「いま、ここ」との違いに疑問を持っていました。「私は、経済的に豊かで衣食住に困らず大学進学もできる。けれども、小泉政権は新自由主義を推し進め、自己責任論が蔓延し、自殺のニュースばかり。アメリカが対テロ戦争としてアフガニスタンとイラクに侵攻し、多くの子どもたちが露頭に迷っている。でも、同級生は豊かさを当たり前のように享受し、誰も政治や社会について語り合おうとせず、「学問とは何か」を問わずして、受験勉強のことしか言わない……。」と。一方で、私は、斜に構えるような見方しかできない自分自身にも「絶望感」に似た感情を抱いていました。普通とは何か。だが、それ以上に「自分の軸」をどう作り、どう行動すればよいか。それらの問いについて苦悩していました。

2001年、本書は映画化されました。主人公は、雪子を演じる安田成美。伏線として描かれるのが、プロのオーケストラ・トランペット奏者を目指すニコライ。彼を演じるセルゲイ・ナカリャコフは、超絶技巧を操り若くしてCDデビュー。1998年のNHK連続テレビ小説「天うらら」のテーマソング「うらら・イン・ザ・スカイ」を吹き、名だたるコンサート・ホールで演奏会を行う人気奏者でした。弱小吹奏楽部で「本物」に飢えていた私は、もちろん、彼の演奏に恋をしました。ミーハー心で行った映画。しかし、高校生の私は、セピア色のような淡々と語られる内容とその深さに、ついていけませんでした。

私は「人生の絶望感」に似た気持ちとミーハー心との境目で本書を手に取りました。ですが、動機以上に、また当時読んでいたヴィクトール・E.フランクルの『夜と霧』や神谷美恵子の『生きがいについて』以上に、本書は言葉をくれたのです。

本当のプラス思考とは、絶望の底の底で光を見た人間の全身での驚きである。そしてそこへ達するには、マイナス思考の極限まで降りていくことしか出発点はない。

究極のマイナス思考は究極のプラス思考なのかもしれません。もしあなたが「生きにくさ」に悩んでいるとしたら、親鸞聖人の教えに沿っている本書は「生きるヒント」を示してくれるかもしれません。

【文化政策学部 芸術文化学科 講師 南田 明美】

『正吉とヤギ』

塩野米松 [文], 矢吹申彦 [絵]

福音館書店, 2021

[913.6/Sh 75]



現在、我が家には8歳と6歳の子供がいます。子ども達と共に時間を過ごす中で、たくさんの絵本を読み聞かせ、最近ではそのラインナップに児童書も増えてきました。数十年ぶりに絵本・児童書に主体的に触れる機会を得て、改めてこれらの持つポテンシャルを噛みしめています。大人も感銘を受けるような卓越した内容や表現、さらには自分自身が子どもの頃に読んだ懐かしい絵本との再会などもあって、日々驚きや感動に事欠きません。

今回は、そのような中で出会った1冊の児童書『正吉とヤギ』を紹介します。南の小さな島で暮らす少年・正吉の家に、生まれたばかりの子ヤギがやってくるころから、物語は始まります。豊かな自然に囲まれた中、正吉と子ヤギの日々の触れ合いがみずみずしく描かれています。

2021年6月に出版された本書は、「聞き書き」という手法で国内外の伝統文化・技術の記録に継続的に取り組む作家、塩野米松氏の著作です。本書も、沖縄の小さな島々で暮らす人々に実際に会って見聞きしたことを元にして作られたそうです。丁寧な日常生活の描写、そして正吉の細やかな心理表現など、塩野氏ならではの持ち味が本書でも如何なく発揮されています。

本書との出会いは、たまたま立ち寄った書店の児童書コーナーでのことでした。表紙に描かれた牧歌的な風景、そして中央に佇んでまっすぐこちらを見つめる子ヤギの曇りなき瞳に、何とはなしに惹かれるものを感じました（このような運命的な出会いが、書店では時々あるものです）。子ども達と一緒に読む前に、まずは自分一人で読んでみよう、頁を繰って読み始めました。読了後、しばらくの間、私は椅子から立ち上がることができませんでした。久しく記憶にないほど、強烈な読書体験でした。

2022年現在、本書に込められた作者の思いと願いは、よりいっそう大きな意味を持って読む人の心に届くことでしょう。ぜひ、お手に取ってみてください。

【デザイン学部 デザイン学科 准教授 小川 直茂】

私の思い出深い一冊は、『日本文学全集』（河出書房新社）に収められている与謝野晶子現代語訳の『源氏物語』です。

『源氏物語』との出会いは、小学生の時でした。その頃の夢は、本屋さんになることでした。たくさん本に囲まれて、静謐な時を過ごすことに憧れを抱いていたのでしょう。その小学時代に読んだ本の中で今でも印象に残っているのが学童用の『源氏物語』です。この学童用の本には省略もあり、物語への理解が追いつかないこともありましたが、華やかな宮廷世界の中に何やら重々しさや厳しさも感じた覚えがあります。特に覚えているのは、六条御息所が伊勢へと旅立つ場面でした。

中学生となり、祖母が揃えていた分厚くて重量のある文学全集の中から見つけて読んだのが、冒頭で挙げた与謝野晶子現代語訳の『源氏物語』です。端正な文章で進められる物語を、古い本特有の匂いとともに、懐かしく思い出します。その後、原文に触れるようになりますが、近代を生きた与謝野晶子の思いが投影されているこの訳は原文とは異なる魅力を持っているように思います。全五十四帖の物語のうち、一番のお気に入りには宇治十帖でした。あまりに有名な「いづれの御時にか」より始まる物語は、光源氏の貴種流離譚では終わらず、さまざまな登場人物の栄華と苦悩のうちに源氏の死（「雲隠」）を迎え、さらには静かな宇治を舞台として源氏の子孫と宮家の三姉妹の物語が幕を開けます。物語では、全体的に女性たちの出家が印象的ですが、宇治では一層、この出来事が際立っているように思います。

中学時代の『源氏物語』といえば、大和和紀の漫画『あさきゆめみし』も忘れられません。古典を漫画にするという熱意から、物語とは解釈するものであることを知りました。物語を書くには至りませんでした。『源氏物語』を真似た王朝物語を思い描き、登場人物の相関図をつくる遊びもしました。その後、歴史家を志したのも、源氏に出会い、いにしへの文に慣れ親しんでいたおかげかもしれません。

【文化・芸術研究センター 准教授 宮崎 千穂】

『源氏物語』 上巻・下巻  
(日本文学全集: カラー版)

紫式部 [著], 与謝野晶子 [訳]

河出書房新社, 1967

[913.369/Y 85]



(書影は上巻)

## 特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

実はこの本、3冊持っていて、引っ越しのたびに行方不明になり新天地で買っています。現在自宅にあるものは3代目ですが、大抵、歴代のものは実家から発掘されます。前2代は、頁の上端角が意図的に折られていたり、本文に線が引いてあったりと、そのときの"私"がつけた〈しるし〉があちこちにあり、なんとなく愛おしくて捨てられず、実家では2冊とも勉強机の棚に鎮座しています。

前置きが長くなりましたが、この本は『西の魔女が死んだ』でおなじみの梨木香歩によるエッセイ集です。学生時代を過ごした英国の下宿先を中心に、人種、信仰、考え方もさまざまな人々との交流を描いています。言いにくいですが、この本を読んで「人生が変わるほどの衝撃!」はありません。それでも、無性に読みたくなる夜があるのです。そして、読むたびになぜか刺すような思いを抱くのです。随所に、異文化を渡り歩く梨木ならではの感覚や、日常を描きながらもはっとさせられる一文が織り交ぜられており、ここに本書の魅力があるといえます。いくつか引用します(頁数は文庫版より)。

そうだ／共感してもらいたい／つながっていたい／分かり合いたい／うちとけたい／納得したい／私たちは／本当は／みな (161頁)

私たちはイスラームの人たちの内界を本当には知らない。分かってあげられない。しかし分かっていることは分かっている。

(中略) 理解はできないが受け容れる。ということ、観念上だけのものにしえない、ということ。(230-231頁)

私たちは他者と交流する中で「共感してもらいたい」「分かり合いたい」という思いを抱いていて、しかし真に〈理解する〉というのは難しいことなのだ気づかされます。この世の中に私が理解できることなどほとんどない、それでも「受け容れる」ことはできる。受け容れて、咀嚼して、ともに考えることはできるのかもしれない。

なお文庫版には、書下ろしの「五年後に」も収録されています。「世界は、相変わらず迷走を続け、そして私もその中にいる」(「五年後に」より、247頁)という一文が、深く突き刺さる人は多いはず。そして驚いたのは、今回紹介した引用箇所はすべて、高校生(初代)と大学生(2代目)の頃の"私"が〈しるし〉をつけた頁にありました。初めてこの本を読んでから10年以上経っても、自身の根底にある思想や祈りに似た何かは、あまり変わらないのだと実感しました。

【大学院 文化政策研究科 2年 倉地 真梨】

### 『春になったら莓を摘みに』 (新潮文庫)

梨木香歩著 [ 著 ]

新潮社, 2006

[914.6/N 55]



### 『遠回りして、ここにきて』

加藤天音 [ 著 ]

文芸社, 2022

[913.6/Ka 86]



普段生活している雑多な街には、心を奪われてしまう愛おしい風景が点在しているのに、どうして人々はそれらに目を止めることなく日々を過ごしているのだろうか— 昨年のちょうど今頃、卒業制作に取り組んでいたこの本の著者である加藤さんと私は、毎週ゼミのある水曜日に朝から晩までそのようなことを話していました。結局、加藤さんは卒業制作で建築を設計するのではなく小説を書く決断をして、それから世界の風景を変えていくことを選びました。その制作を、加筆して生まれたのが小説『遠回りして、ここにきて』です。

この物語には3つの地方都市それぞれで、ひとつの家に集まって暮らす人々の姿が描かれています。それぞれの人生の中で、たまたま重なった一部分の日常の物語は、決して激しいものではないけれど、ただ平坦なものでもありません。生きていれば誰もが抱える仄暗さと幸福が共存しているからこそ、自分の人生のどんな瞬間にもそっと寄り添ってくれます。

先日、加藤さんの住まう山梨を訪ねました。甲府はどう言葉で表すべきか難しいけれど、不思議な空気感を纏っていて、加藤さんがこの地を気に入り、移住した理由がほんの少し分かった気がします。身軽に拠点を移し、猝に捉われず伸びやかに生きていく10人の登場人物と加藤さんの姿にはどこか重なる部分があります。その姿が羨ましく、紡がれる言葉の中に街へのまなざしを受け取るたびに加藤さんの見ている世界を覗くことができたようで嬉しくなります。

どれだけ建築や都市を設計しても、どれだけ魅力的な風景の写真を撮っても、それを言葉にしても、掴みどころのない即物的なものが街を襲い続けるし、そう簡単に人々は街に目を向けてはくれません。そのような現実を目の当たりにするたびに、どうしようもない気持ちになります。それでも私は、その果てしなさに絶望しそうになるたびに、何度もこの本を読み返すと思います。不器用で不恰好で愛おしい街や人々が、おおらかに生き続けることができる日を願って。

【大学院 デザイン研究科 1年 岡田 美憂】

有馬朗人先生が語る思い出の本

平成22年4月から本学理事長を務められた有馬朗人先生は、令和2年12月6日に逝去されました。有馬先生は、本や図書館に熱い思いをお持ちで、在任中はよく当館をご利用いただきました。

『温故知新』Vol.21では、有馬先生のロングインタビューを掲載しました。今回はそのインタビューから「思い出に残る本」についてのお話をご紹介します。

「物理学、考古学への誘い」<sup>いざな</sup>有馬朗人 [述]

私には、子どもの頃から非常に親しんだ本が2冊あります。1冊は、小学校3年の春に両親から買ってもらった石原純の『世界の謎』という本です。物理と生物、それに考古学の世界の謎が書いてある本でした。私はその中で、生物にはあまり関心を持たなかったのですが、物理と考古学に大変興味を持ちました。考古学は今でも好きですが、物理をやったらどうかというヒントを与えてくれた本でした。自分で実験したり、それ以外の本をたくさん読んだりして物理学者の道を選んだのですが、最初に物理の面白さ、特にX線の面白さや不思議さを勉強したときに読んだのがこの本だったのです。

もう1冊は、夏目漱石の弟子で子ども向けの小説や童話を書いた鈴木三重吉が著した『古事記物語』で、これも小学校3年生の頃から読んで、日本神話だけでなく、世界の神話に興味を持たせてくれました。ところが、中学校3年生の時、2冊とも浜松の空襲で焼けてしまいました。大事にしていた本だったので残念でしたね。

その後、浜松の北の敷地村という所に疎開するのですが、そこで私の先輩のひとりが、何冊か本を貸してくれたのです。浜松第一中学校の3年生の秋でした。その本は、アインシュタインとその弟子のインフェルトが書き、石原純が翻訳した『物理学はいかに創られたか』です。私はその上下2冊をずっと読んでいて、進学して東京に行った後に改めて買って、今でも私の本棚にあります。その本には、ギリシャ以来の物理学の発展、そして現代物理学、量子力学、相対性理論などが実に要領よく、自分の考えなども含めてきれいにまとめて書いてありました。

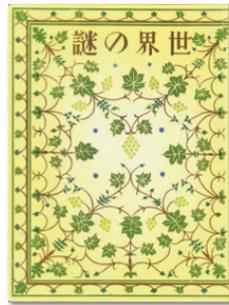
大学院生の時に『神・墓・學者：考古学物語』という本を読みました。面白いことが色々書いてあるのですが、中でもメキシコの考古学についてかなり詳しく書いてありました。私はメキシコの考古学を全く知らなかったのですが、「メキシコにピラミッドがある」と書いてあり、果たしてそれはエジプトのピラミッドの影響を受けているのか、といったことが解説されていて、大変興味深かったですね。また、メキシコにはテオティワカンという遺跡があって、「太陽のピラミッド」と「月のピラミッドがある」と書いてあったのです。この本が考古学、特に世界の考古学に、改めて興味を持たせてくれました。

インタビューの全文は、静岡文化芸術大学 学術リポジトリでお読みいただけます。  
静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより『温故知新』Vol.21  
<http://id.nii.ac.jp/1132/00000022/>

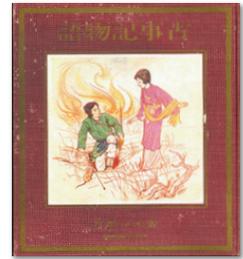


有馬 朗人 先生

- 昭和31年 4月 東京大学原子核研究所助手
- 39年 8月 東京大学理学部助教授
- 46年 1月 ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校教授
- 50年 6月 東京大学理学部教授
- 平成 1年 4月 東京大学総長
- 5年10月 理化学研究所理事長
- 10年 7月 参議院議員
- 文部大臣
- 11年 1月 科学技術庁長官兼務
- 12年 6月 財団法人日本科学技術振興財団会長
- 科学技術館館長
- 16年 7月 武蔵学園学園長
- 18年 4月 公立大学法人静岡文化芸術大学理事長
- 22年 4月



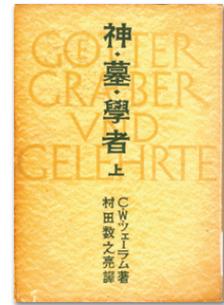
石原純編 『世界の謎』  
新潮社, 1936



鈴木三重吉著 『古事記物語』  
中央公論社, 1937



アインシュタイン、インフェルト著、  
石原純譯  
『物理学はいかに創られたか』  
(上巻・下巻)  
岩波書店, 1939-1940



C.W.ツェラム著；村田数の亮訳  
『神・墓・學者：考古学物語』  
(上巻・下巻)  
養徳社, 1955-1956

有馬朗人先生 回顧展のご案内

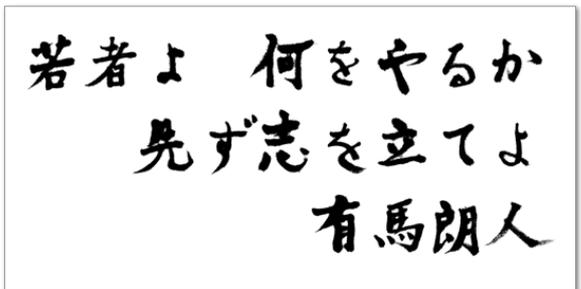
本学前理事長 有馬朗人先生の遺品やゆかりの品々を展示する回顧展を開催します。浜松で過ごした少年時代、教育への思い、俳句に込めた郷土愛など、「浜松」をめぐる有馬先生の功績をたどります。

日程

令和5年3月1日(水曜日) から 3月9日(木曜日) まで  
※3月5日(日曜日)は、全館電気設備点検のため休展

会場

静岡文化芸術大学 ギャラリー  
(回顧展終了後の3月中旬から、図書館・情報センター内の展示スペースに於いて、本学ギャラリーでの回顧展をもとにした展示を行う予定です。)  
※本学には、一般の方の駐車場はございません。公共交通機関をご利用いただくか、近隣の有料駐車場をご利用ください。



有馬先生 揮毫の書 (展示予定)

お問い合わせ

静岡文化芸術大学 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1-1  
Tel. 053-457-6113 (平日 8:30~18:00)  
<https://www.suac.ac.jp/>

